

教科書を批判的に読み解く

私の一押しの授業理論

「教科書は正しいのか？」

これまで小、中、高校と社会科の授業を受けてきましたが、常々感じてきたことは、教科書の内容、載っている知識をただ教えられ、覚えてきた。その中で教科書に書いてあることは絶対に正しいとして受け入れるほかありませんでした。しかし、教科書に書いてあることを事実として受け入れるだけで、深い理解はできているのでしょうか？これでは国家や社会が定めたものにただ従う子ども、藤瀬先生の言い方を借りれば“国家・社会の順応者”が育成されてしまいます。社会科の目標である“国家・社会の形成者”の育成につながっているとは到底思えないのです。

ないのです。

しかしながら、教師は教科書を使用する義務があり、教科書からあまりに逸脱した内容を教えることはできません。結果として、多くの教師が子どもに対して教科書“を”教えるにとどまってしまう、前述のように“国家・社会の順応者”を生み出してしまっています。なにより、生徒にとっても教科書に書いてある事実を網羅するだけのつまらない授業になってしまいます。

では、教科書を上手く活用することで“国家・社会の形成者”を育成につなげられないか、より生徒に深い学びを提供できないか考え、それを実現しようとしたのが、藤瀬泰司先生の「批判的教科書活用論」です。

どんな理論？ ○生徒に教科書の意図を読み取らせる！！



どうやって授業を作るの？

6つのステップと2つの段階で作成する

①タイトル・見出しの分析

②本文・資料の調査

③学習課題と回答の仮設

④学習課題と回答の修正・確定

⑤アウトラインの構想

⑥教授計画書の作成

執筆者の意図を徹底的に読み解いていく段階

その意図に基づいて実際の授業、発問を作っていく段階

どんな授業になるの？ (具体的実践例：テーマ『イギリスの産業革命』)

○生徒に教科書の学習課題の回答を「予想」「探求」「吟味」

導入

- 「産業革命によってどのような変化が起きたのだろうか」という学習課題の回答を生徒に**予想**させる
- 教科書の記述に注目して予想

展開①②

- 学習課題の回答を生徒に**探求**させる ← **執筆者の意図を考える**
- 生徒が**予想**すると考えられる影響と**しない**と考えられる影響に分ける
- ①労働災害、社会主義概念の誕生→②イギリスでの二大政党制等
- 生徒が予想を確認・修正し、内容の具体的理解と教科書が想定する回答の全体像の把握

終結

- 学習課題の回答を生徒に**吟味**させる
- 教科書の記述だけで学習課題の回答は妥当か**批判的**に読み解き、考える
- 一見、産業革命とはつながっていないように思える歴史的事実を提示し、教科書に載せるべきか否かを生徒に考えさせる ← **自分の教材研究を反映**
- 2パターン 例) A:産業革命と南北戦争 or B:時刻表や標準時とのつながり

どんなメリットがあるの？

生徒には...

- 執筆者の立場から教科書の内容を深く学べる → **作品的教科書観の獲得**
- 教科書の内容を吟味し、批判的に読み解ける → **批判的視点の獲得**

教師には...

- 教科書使用義務を果たしている
- 教科書を活用しながら“**国家・社会の形成者**”の育成につなげられる
- 自身の**教材研究を授業に生かす**ことができる

今、必要とされる理論

教師は授業をする上で、教科書から逃げることはできません。日本の教師は必ず教科書を活用しなければならぬ。結果、様々な社会科理論が開発されても、**教科書に縛られた教師**は開発された理論を駆使できず、“国家・社会の順応者”が育成されてしまう現状があります。

藤田先生の「批判的教科書活用論」はそんな**教師の現状に即した**ものです。ただ単に教科書を“教えるではなく、子どもたちに教科書はなぜこ

うなっているのかと**著作者の視点**から考えさせ、より深い学びを実現します。さらに**教科書の吟味**をさせることで、**批判的視点の獲得**させ、社会科の目標である“**国家・社会の形成者**”の育成につなげています。同時に、教師の**教材研究も生かす**ことができる構成となっています。

以上のように、藤瀬先生の「批判的教科書活用論」は社会科の目標と教師の現状を反映した理論であることから、**今、必要とされる理論**と言えるでしょう